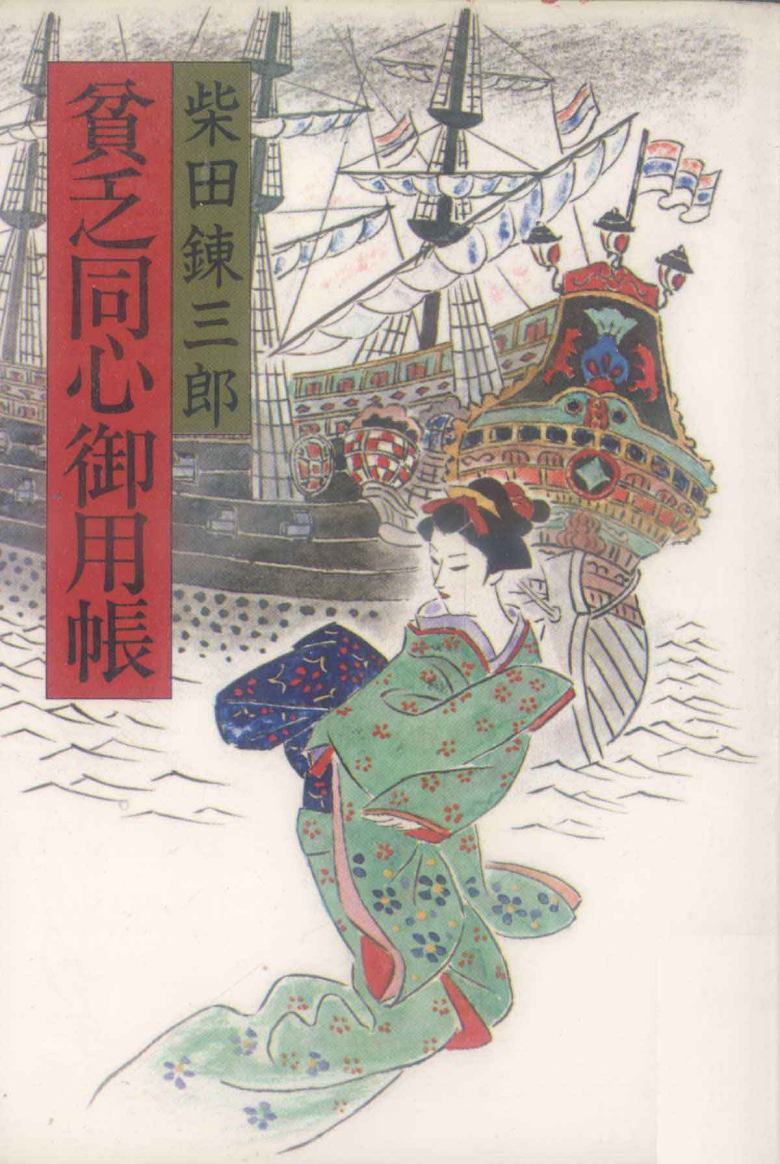
貧乏同心御用帳
柴田錬三郎

集英社文庫

貧乏同心御用帳

1981年10月25日　第1刷
1988年4月28日　第17刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　柴田錬三郎
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
〒101—50
電話　東京 (230) 6100 (編集)
(230) 6171 (販売)
(230) 6080 (製作)
印刷　大日本印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© E. Saitou 1981　Printed in Japan

ISBN4-08-750456-5　C0193

集英社文庫

貧乏同心御用帳

柴田錬三郎

集英社版

目次

南蛮船……五
埋蔵金十万両……八九
お家騒動……二〇五
流人島……二七九
解説　大久保房男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

南蛮船

その一

まことに、奇妙な家であった。

わずか三部屋（のみならず、そのうちの一室は、畳を横に六畳ならべた細長い、使いものにならないものであった）の家に、十人が同居していたが、主を除けば、のこらず、少年なのであった。

上は十四歳から、下は六歳まで、丸い顔、四角な顔、肥ったの、痩せたの、目やにをためている奴、四六時中くんくん鼻を鳴らしている奴、口笛の上手な陽気な子、むっつりして大人びた表情の子――共通しているのは、いずれも両親の顔を知らぬ少年たちが、起居しているのであった。

主の大和川喜八郎は、江戸町奉行所の町方同心で、三十二歳、いまだ妻帯したことはない。したがって同居させている少年九人のうち、自分の子は一人も含まれていない。

町奉行所の同心など、貧乏を裃にしてきている、といわれるくらいなので、妻子三人ぐらしでも、まともな三食を摂れる状態ではなかった。

食い盛りの少年を九人もかかえて、しのぎがつく道理はないのであったが、そこが、面白いところで、義理人情と心意気の尊重される江戸の市井では、かえって、この私設孤児収容所には、食いきれぬほどの品ものが贈られるあんばいで、むしろその点では、近隣の同役の台所よりもゆ

たかにさえみえる。

そればかりか、九人の少年が、いずれも、小ざっぱりした筒袖をまとっているのも、あちらこちらの世話やきのおかげであった。

大和川喜八郎が、特に子供好きであったという次第ではない。はじめは、やむなく、一人あずかっただけであった。

ある裏店に住んでいた西国出身の浪人者が、浅草奥山で、十歳あまりの浮浪児を使って、手裏剣の見世物をやっていた。

浮浪児を、三間あまりはなれた地点へ、戸板を背にして立たせておいて、この軀のまわりへ紙一重に手裏剣を打ち込む、という芸当を見せていたのである。

この浪人者は、酒ぐせがわるく、ある宵、浅草界隈の地廻りを十数人もむこうにまわして、乱闘した挙句、斬り殺されてしまった。

この事件をとりあつかった大和川喜八郎が、地廻りを数珠つなぎにして、小伝馬町の牢屋敷へほうり込んでおいて、自宅へもどって来ると、浪人者に養われていた浮浪児が、ちょこんと坐っていたのである。

いわば、小さな押しかけ居候であった。

「しようがねえ。飯ぐらいはたけるだろう」

と、許してやると、十日も経たないうちに、一つか二つ年下の浮浪児を、つれて来た。

「あの町方は、孤児をやしなっている」

という評判が立つと、お節介な者が、わざわざ、遠くから、二、三歳の捨児をつれて来て、「お願いします」

と、置いて行ったりして、この数年で、九人に増えてしまったのである。

喜八郎は、孤児たちをかかえてみると、少年同士で、ちゃんとくらしの秩序をつくることを、知らされたことだった。

こちらが、いちいち、教えずとも、少年同士が、勝手に、炊事当番やら掃除洗濯係りやらをつくって、輪番制をもうけ、また、年上の子は年下の子の面倒をみるし、すり傷の手当から寝小便の世話まで、一切、自分たちの手ですませてしまうので、喜八郎自身は、何もせずに、ただ眺めているだけでよかった。

喜八郎が教えることといえば、手習いだけであった。

九人も同居していながら、家の中は、きわめて静かであった。

時には、反目し合って喧嘩も起るが、その時は、裏の空地へ出て、正々堂々と、組打ちをやっている様子であった。着物はよごれるから、双方すっ裸になって、土まみれ傷だらけになって、へとへとになるまで、組打ちをつづけ、一方が「参った！」と悲鳴をあげて、終了すると、見物していた少年たちが、井戸端へつれて行って、きれいに洗ってやり、傷の手当をしてやって、喜八郎には、内緒にしておく、といった掟をつくっている。

喜八郎にとって、こういう少年たちの相互扶助のくらしぶりを眺めているのは、面白かった。

しかし、この狭い家では、九人が限度で、これ以上増えたら、やりきれないことだった。

残暑が、きびしい季節であった。

町奉行所の下役の家のならんだこの一廓は、窪地で、泥溝の水はけがわるいので、白昼でも、蚊が渦を巻いて、うなりをたてている。

縁さきで、少年たちが松葉をくすべて、どうにか、しのいでいるありさまであったが、そのために、屋内には、煙がこもって、かえって、午寐どころではない。

主の喜八郎の午寐の場所は、座敷の床の間であった。非番の日は、花莫蓙を敷いて、ごろごろしている。

座敷の隅では、三、四人が、手習いをしていた。

寐がえりを打って、

「暑い！」

思わずもらした時であった。

「旦那様、お客さんです」

一番年長の壱太が、玄関から、告げた。

喜八郎は、この家へやって来た順番に、壱太、弐太、参太、四太、五太、六太、七太、八太、九太、と名づけていた。

座敷へ上って来たのは、数軒置いて住んでいる同じ町方同心の佐原三郎次であった。

佐原三郎次は、四年ばかり前から、肺を患って、禄盗人のかたちになっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

「暑いのう。今年は、梅雨からひきつづいて、霖雨で七月がつぶされたから、暑さが秋を遠ざけたな」

そう云って、佐原三郎次は、いかにも、だるそうに、あばらの浮いた胸を蒼白い細長い手で、撫でた。

「金なら、ないぞ」

喜八郎は云った。

三郎次が、やって来る用向きは、きまっていたからである。

「金なら、ある」

三郎次は、こたえた。

「珍しいな。……どういうのだ？」

「うむ！」

三郎次は、宙へ、暗い視線を据えていたが、

「女房の奴、春をひさいで居るらしい」

と、吐き出すように、云った。

「証拠でもあるのか？」

喜八郎は、眉宇をひそめた。

町方同心の妻が、貞操を売っているとは、ききずてならないことだった。

「証拠は、ない。これは、カンだ。同心のカンが、こんなところで、役に立とうとは、皮肉な話

だ」

三郎次は、苦笑してみせた。

「カンは、はずれることがある」

「あいにくだが、このカンだけは、はずれて居らんな。……しかし、わしが、文句を云えた義理ではない。女房が、春をひさいで居ろうと、乞食をして居ろうと、わしは、黙っているよりほかはないのだ」

「……」

「女房は、わしと二人の子供を、やしなってくれているのだ。これまで、やりくり算段で、愚痴ひとつこぼしたことはなかった。いよいよ切羽づまってからも、黙っていた。切羽づまった挙句、からだを売るすべしかない、と考えたに相違ない……わしが、それを、気づいても、止める力はないし、知らぬふりをしているよりほかはないのだ」

喜八郎は、三郎次の妻杉江の、面長な、整った容貌を、思い泛べた。

佐原家へ嫁いで来た当時は、貧乏同心の女房には過ぎた美人だ、と噂されたものだった。

独身者の喜八郎には、想像するだけで、それがどれほど苦悶に満ちたものか、判らぬが、三郎次の心臓を嚙みくだいている嫉妬は、名状しがたい激しさに相違あるまい。

「お主、杉江さんを、ずっと、抱いては居らぬのだろう？」

「うむ、もう二年も――。ところが、あいつが、春をひさいで居る、と気づいてから、わしは、抱きたい衝動に、毎晩、かられて居る。気が狂うほどの衝動だ」

「どうして、抱かぬのだ？」
「抱けぬ。手を、のばしかけては、止めてしまう。……お主には、この気持は、わかるまい」
「わからぬ」
「杉江のからだが、手のとどかぬものになってしまった、という恐怖が起るのだ。その恐怖で、どうしても、抱けぬ」
「抱いて、恐怖を、追いはらえば、よかろうに――」
「他人の男が、抱いた女房のからだを、亭主が、おなさけに抱かせてもらう――こんな屈辱が、またとあるか」
三郎次の顔面は、醜いまでに、ゆがんでいた。
喜八郎は、応える言葉がないままに、じっと、三郎次を見まもっていた。
三郎次が訪れた用件は、これまで借りたまった金の一部を、返すことだったが、喜八郎は、受けとらなかった。
三郎次は、去りがけに、少年たちが、夕餉のしたくをはじめたり、小さな庭へ打水をしたりするさまを眺めて、
「お主のくらしぶりが、うらやましい」
と、云った。
「これでは、女房の来手はあるまい」
喜八郎は、笑った。

「女を抱くのは、吉原か深川あたりの岡場所があるし、お主は、この独身ぐらしをつづけた方がよい。わしも、生れかわれるものなら、お主のまねがしてみたい」

三郎次は、そう云って、軽い咳をのこして、去った。

大和川家の壮観は、食事時であった。

壱太、あるいは、弐太が指揮をとって、一汁一菜が、十箇の箱膳にならべられ、全員これに就くと、一斉に、次の文句を唱和する。

「ひとつ、嘘を吐くまじ。

ふたつ、盗みを働くまじ。

三つ、生れ来たることに、よろこびを持つべし。

四つ、今日が過ぎれば、明日ありと思うべし」

この四箇条は、喜八郎が、つくってやったのである。

喜八郎自身、べつに、生きる上での信条を持っている次第ではなかった。なんとなく、つくってやったに過ぎない。

しかし、少年たちは、この四箇条にしたがって、一日一日をすごしている。

そのくらしぶりがあっぱれなので、大きな商家から、

「小僧に、ひとつ――」

と、のぞまれることがある。

喜八郎は、少年たちの意志にまかせているが、一人として、お店奉公に出ようとする者は、いなかった。

その代り、家に一文もなくなると、壱太、弐太、参太など、十三歳から上の少年たちは、臨時かせぎに出かけて行く。これも、喜八郎の指令ではなく、かれらの自主的な行動であった。

棒手振り、左官の泥こね、河岸の荷揚げ、泥溝さらい、朱引外（郊外）の田植えの手伝い、小鳥捕り、花売り、上野・両国・浅草の広小路での見世物小屋の下働きなど、少年たちは、あらゆる仕事を見つけて、働いた。その働きぶりは、蔭日向がなく、誠実でけんめいだったので、評判がよかった。

少年たちは、自ら、

「同心組」

と、称していた。

喜八郎としては、事件が起って、下手人探索に、なまじの経験を鼻にかけた岡っ引や手先を使うよりは、少年たちを使った方が、役に立った。少年たちが、その純粋な目に映した働き場所の裏表の生態が、大いに参考になったからである。

夕餉がおわった頃、この家に、また一人、訪問客があった。

しのびやかに、武家屋敷の駕籠が、乗りつけられた。

少年たちは、裏の空地で、花火に興じて居り、屋内には、壱太しかのこっていなかった。

「旦那様、お客さんです」

壱太が告げに来た時、喜八郎は、釣竿の手入れをしていた。これは、趣味ではなく、食膳にのせるための仕事のひとつであった。もっぱら、夜釣りだが、その時は、少年を二、三人、つれて行く。

「誰だ？」

「女子衆です。お武家の、えらそうなお女中です」

「通せ」

座敷に入って来たのは、五十年配の、長い歳月を武家屋敷の奥向きですごした者共通の冷たい表情を持った老女であった。

「折入って、おたのみの儀が、あって、罷り越しました」

老女は、頭の高い挨拶をしてから、そう云った。

この時刻の訪問は、世間に知られたくない内密の依頼であり、こちらも、それに対する応対をしなければならなかった。

町方同心が、武家屋敷から、なにかの事件の解決を依頼されるのは、報酬がいいので、待っていました、とばかり引き受け甲斐があった。

しかし、喜八郎は、これまで、個人指名の依頼を引き受けたことがなかった。役人のくせに、頭を下げるのが、きらいな男だったからである。

こうした場合、喜八郎は、事件の内容をきく前に、いきなり、途方もないほど高い報酬を、ふっかけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor